記憶のかたすみで。

ケント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
記憶のかたすみで。

【Ｎコード】
Ｎ１８３９Ｂ

【作者名】
ケント

【あらすじ】
シュウという名前の少年の記憶の物語。

プロローグ

オレ達はあの冬、一つになった……。

「あ”～寒い…」
オレは玄関を開け放ち、早足で学校への道を進んでいた。
「この寒さは異常だろ、死ぬし」
と、独り言を言いながらそそくさと歩いていると、あいつが現れた。
（よりにもよってこんな寒い日に…）と、心の中で思っていると、案の定、こっちに向かって進んできた。……猛スピードで。
「シュウ！おっはー！！」
異様に高いテンションで体当たりとともに、古い挨拶をしてきた。
オレは体当たりをよけて、
「…おっはー」
低い声で無愛想に挨拶した。
「どうしたどうした？テンション低いぞ！！」
お前が高すぎるんだよ。
「ユリ、朝からお前に会うとテンション下がるし」
冷たくあしらうと、「シュウ、死ね」
跳び蹴りがわき腹にヒットした。
「ごめんなさい」
痛いのはやなので、素直に謝るオレ。「よろしい」
と、威張って言っていた。ユリはオレの一つ下の女の子で、非常に生意気だ。テンション高いし。
「シュウ、彼女いるの？」
「いねぇ」
即答。

「あ、あたしが付き合ってあげる？」
「けっこうです」
またも即答。
ユリは泣き目で、
「あたしぢゃだめなの？」
と、言ってきた。
泣かれるのは面倒なので、
「わかった、付き合ってやるから泣くなよな」
と、つい、言ってしまった。
（ヤバ……）
これがオレに残っている少ない記憶の一つだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1839b/

記憶のかたすみで。

2011年1月26日04時04分発行